

奇縁——大拙につばさをつけた人々——

日本民藝協会常任理事
真宗大谷派大福寺住職

太田 浩史

一 盤珪との出会い

中学生のころ、私は「引きこもり」状態になり、ずいぶん暴れて両親を困らせたことがある。ある日野球のバットで家のガラスを全部割ってしまった。だが父は叱らず、隣町の吉田龍象しやうという念仏者に風呂敷包みを届けるよう頼んだだけだった。吉田師は「白道舎」と称する説教場を兼ねた一軒家に住んでいた。

私は吉田師の温顔に思わず「何をしても面白くない時はどうしたらいいですか」とたずねた。やおら師は私の胸倉をつかんで引き倒

し、馬乗りになり「それなら、面白いことが見つかったときは、どうしてくれるんじゃない」と目をむいて怒鳴った。その瞬間、不思議なことに私は自分をしばらくあげていた目に見えないもやのようなものから自由になっていたのである。吉田師は「わしの師匠は、鈴木大拙というんじや、よく覚えとけ」と言った。そのときに私に大谷大学に行くという道がひらけた。

参禅仲間・梅路見鸞老師

大谷大学に入った私は無影心月流弓道と出

会う。宗家は鷺野ささの暁あき師範という姫路の寺の住職で、この人がまた鈴木大拙ゼミの出身だった。無影心月流の流祖梅路見鸞うめじけんらん老師は九州日田の出身で本名を山本寿六やまもとじゅうろくといい、手におえないやんちゃ者だったので、鎌倉の円覚寺に入れられ、鈴木大拙の師しやくそうえん釈宗演しやくそうえん老師のもとで「血を吐く思いの十数年間」を過ごしたという。あるとき宗演老師は「犬になれ、四つん這いになって、ワンと云え」と命じた。これが大変な難題だった。梅路老師は「真の修行」〔『武禅』創刊号〕で次のように回想している。

犬の真似は容易だが、犬には成り切れぬ。如何にも馬鹿らしい、人間が犬になれるかなどと云った、自惚うぬぼれの撞着がどうしても心の一角に潜在していて、如何にしても成り切れぬ。それで散々棒喝を

喰って、初めて「自惚だ」と気がついた。この自惚がある間は何をしても真の仕事にはなつて居らぬ。いわんや道を修行するなどと笑止千万、我ながら笑わざるを得なかった。「馬鹿野郎、今日まで何しにうせた、タワケめが」と大雷一下、この時はじめて正師しやうしの有難味が明瞭に判った。有難いと思う刹那に心の弛みが出た。また一喝一棒を頂戴した。犬になるのを忘れていた。見事真の犬になり切ってしまった。それから一ヶ月ほどの後であった。犬になり切れた事を喜んでいた時であった。呼ばれるままに近寄ると、「面めんを洗ってこい」、云われるままに洗面して来ると、「それで綺麗になったか」ハツと正念に帰った。